

マーケット概況（2019年8月）

8月の債券相場は、米FOMCで10年半ぶりの利下げが決定されたが、本邦債券市場への影響は限定的で、10年355回債は前月末比変わらずの-0.160%で始まった。1日の10年債入札がやや弱めの結果となり、10年355回債の利回りは-0.135%まで上昇したが、米国が中国に対する追加関税を発表すると、米中貿易摩擦による世界的な景気減速への懸念が強まり、債券相場は買われる展開となった。6日の30年債入札は高値警戒感からやや弱めの結果になったものの、売りが一巡すると再び買い優勢となり、債券先物も連日最高値を更新した。9日の日銀による買入オペでは買入額が一部減額されたが、超長期債を中心に買いが途切れず、各年限のカレント債は直近高値を更新した。中旬以降も香港でのデモ拡大や、中国や欧州の経済指標の悪化によるリスク回避の地合いから、債券相場は堅調に推移し、16日の買入オペにおいては再度減額があったが、想定範囲内であったことから先物・現物債共に買われる展開となった。23日にジャクソンホールで開催されたパウエルFRB議長の講演では追加緩和に前向きな姿勢が示唆されたことに加え、米中貿易摩擦の激化への懸念材料もあり、26日には債券先物9月限が史上最高値となる155円37銭まで上昇し、10年債も29日に2016年7月以来の-0.290%まで利回りが低下した。月末には月内3度目となる買入オペが減額されたことで一旦は売られたものの、10年355回債の利回りは-0.280%と高値圏で月内の取引を終えた。

<短国市場>

月初は3Mゾーンの投資家の需要が乏しく軟調に推移した。2日の3M848回債入札では、最高落札利回りが-0.10%台に上昇し短期政策金利に接近した。6日には、国庫短期証券買入オペが増額されたものの、9日の3M850回債入札は-0.09%台と2017年7月以来の高水準となった。その後、国内外の投資家から次第に買いが入り入札毎に金利低下する展開となった。30日の3M854回債入札では-0.16%台と2019年4月以来の水準に低下した。セカンダリー市場では-0.16%台で推移し、最終的に3M854回債は-0.168%で取引を終えた。6Mや1Yは中期債の金利低下や国庫短期証券買入オペに支えられ、月を通して概ね-0.2%台で堅調に推移した。

<一般債市場>

新発政保債、地方債は国債金利のマイナス圏が定着するなか、絶対値方式のプライシングが継続し、クーポンは前月比同水準で決定した。プラス利回りが確保できることや、全般的に発行額が少なかったことで需要は好調であった。超長期ゾーンでは上旬に20年国債の利回りが急低下した流れを受け、20年地方債も約3年ぶりに絶対値方式を導入し、下限利率0.200%で起債された。社債では、夏季休暇シーズンを挟んだことで大型案件や個人向け債の起債は無く、前年同月並みの3,615億円が発行された。国債金利が下げ足を速めると高格付け債やユーティリティ銘柄では発行年限の長期化が目立ち、下旬に起債された大阪瓦斯（9月払い込み）では国内3例目となる50年債をローンチした。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#355	-0.160(1日)	-0.290(29日)	-0.135(1日)	-0.280(30日)
#354	-0.165(1日)	-0.305(29日)	-0.145(1日)	-0.290(30日)
#344	-0.250(1日)	-0.385(28日)	-0.235(1日)	-0.375(28日)
#140(5Y)	-0.235(1日)	-0.365(26日)	-0.225(1日)	-0.355(30日)
#169(20Y)	0.195(1日)	0.040(30日)	0.220(1日)	0.045(30日)
#849TDB(6M)	-0.210(8日)	-0.270(28日)	-0.200(8日)	-0.270(28日)
#847-#854TDB(3M)	-0.120(2日)	-0.185(30日)	-0.095(9日)	-0.168(30日)